

いずみ

第30号記念特集

2010年1月1日発行

(題字: 國松 明日香氏)

本郷新彫刻シリーズ 30



西 忠義 翁
安政3年～昭和9年
明治34年浦河支庁長



鈴木 清 翁
嘉永元年～大正4年
赤心社創立社長



澤 茂吉 翁
嘉永6年～明治42年
赤心社副社長荻伏入植

《荻伏開拓功労者の像》 日高管内浦河町荻伏支所

これらの像は1935年(昭和10年)9月25日、荻伏村(現浦河町)の第1回開拓記念を祝って建立された。44年(同19年)には国策の金属回収で供出の憂き目にあったが、52年(同27年)9月、荻伏村70周年記念事業の一つとして復元された。碑の作者の紹介に「日本の名匠彫刻家本郷新の若き日の作である」とある。

(文・写真 仲野三郎)

「いずみ」30号 目 次

本郷新彫刻シリーズ 30 「荻伏開拓功労者の像」	表紙
目次 彫刻美術館行事予定	2
巻頭言 『街中の美を守ろう』運動をめぐって	橋本信夫 …… 3
座談会 「会報『いずみ』創刊から 30 号まで」	4
「創刊から 30 号—本郷新に思いを込めて」	仲野三郎 …… 6
「会報『いずみ』30 号までの軌跡」	大内和 …… 7
十勝・中札内美術村バスツアー体験記	
小笠原悦子、斎藤隆志・ミサヲ、森茂樹、車谷津矢子	8
友の会ニュース 友の会 2010 年新年会、解説ボランティア募集ほか	10

本郷新札幌彫刻美術館展覧会案内 (2010年1月～3月)

本 館	記 念 館
<p>—2010年3月28日まで 本郷新・平和への祈り—無辜（むこ）の民—</p> <p>一般市民が地域紛争に巻き込まれ、悲惨な状況に置かれた1970年に本郷は、平和への祈りを込めて「無辜の民」シリーズを制作した。本郷の祈りは15点の作品に結実した。</p>	<p>—2010年3月28日まで 若き日の本郷新—彫刻家の原点—</p> <p>東京高等工芸学校在学中に国画会に初入選入りした「少女の首」など初期の彫刻・絵画を中心に展示。本郷の彫刻家としての原点を探る。</p>

本郷新記念札幌彫刻美術館 札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709
 ◇開館時間：午前10時—午後5時◇休館日：月曜日（月曜日が祝日などの場合は翌日）◇交通機関：地下鉄東西線「西28丁目」駅下車 ジェーアール北海道バス「環20」山の手環状線3番乗り場、「彫刻美術館入り口」下車、徒歩10分

「街中の美を守ろう」運動をめぐって —新しい市民文化活動の視点から

友の会会長 橋本 信夫

友の会が自主運営を始めて7年余りが経過した。自立と同時に新生友の会の活動方針や事業内容を伝える会報「いずみ」が企画され、今回ついに30号の大台に達した。会員それぞれが企画、編集、印刷、配布を分担し、不慣れな作業に汗をかき、持ち味と経験を生かし、苦楽を分かち合いながら号を重ねた成果である。

こうした熱気の中、あれこれと彫刻情報が行き交い、いつの間にか自然にこの会でも実施可能な身近な事業として市内彫刻の清掃プログラムが浮上した。

この清掃活動は年々拡大し、さらに、「街中の美を守ろう」をスローガンに他のボランティア団体とも協力し合って、より効果的で大掛かりな清掃も可能となってきた。

しかし、市全域の野外彫刻に目配りして活動を展開するには、まず、各作品の詳細な情報が手元になければならない。幸いにも20年以上にもわたる会員の努力によってすでに大半の市内彫刻の写真と資料が収集されていたため、これらは直ちに作品の情報検索に活用された。さらに昨年夏、札幌市が野外彫刻の総合調査を実施したことから友の会の資料も市に提供し、現在、両者を照合して内容の充実が図られている。

一方、会ではデータベースを元に地図上で彫刻の写真や解説記事を検索できる彫刻地図コンテンツのひな形が完成し、多くの

作品で入力を終えた。このコンテンツは彫刻情報を地図上で一括して掌握できるため、作品のPRのみならず維持管理の面でもきわめて便利である。目下、解説部会が鋭意作品解説の記事作りと取り組み、内容を整えつつある。

さらに、札幌市生涯学習振興財団「ちえりあ」から委託された彫刻関連ビデオの制作も今年で6作目となり、彫刻芸術の魅力を伝える上の大きな武器となってきた。また、会報「いずみ」の編集や地図コンテンツに関連したホームページ制作も市内彫刻のカレント情報を伝える大きな分野として準備中である。

会では新年度の重点事業として市内彫刻全般に通じた彫刻ガイドの育成プログラムを計画中である。これらのガイドは屋外で活動する彫刻芸術のキュレーターとして期待されるだけに、研修プログラムの充実と出来るだけ多くの人々の参加が待たれている。

今年度も友の会は「街中の美を守ろう」運動を前面に、彫刻清掃、「いずみ」発行、美術館巡り、作品解説、彫刻地図コンテンツ制作、ビデオ制作や彫刻ガイド育成などの様々な事業に挑戦する。会員の地道な努力を背に、この会の活動が時代に即した市民文化運動の一角として定着し、札幌の芸術文化の振興に役立ち得れば幸いである。

座談会 会報「いずみ」創刊から30号まで

会報「いずみ」が2002年の創刊から今号で30号を迎えた。年4回の発行で7年。一度も途絶えることなく発行が続けられた「いずみ」の現在、過去、未来を創刊当時から編集に携わってきた仲野三郎、橋本信夫、斎藤美年子（＝写真左から）の3氏に語ってもらった。司会は編集担当の大内和。



友の会自立運営がきっかけ

——会報「いずみ」の創刊号は2002年9月1日の発行ですが、どのようなことから会報発行が決まったのでしょうか。

橋本 友の会の発足は札幌彫刻美術館の誕生と同じく1981年です。会報の創刊まで20年余りの年月が経っています。当初、友の会の運営は美術館側に委ねられていた格好でしたが、会の運営、活動を自主的にやれないものかという声が増え、2002年、友の会が館から自立する形になりました。当時の会員は70人くらいでした。これらの人たちに会の活動、意図するものを伝えるためには会報のようなものが必須ということで創刊が決まりました。

仲野 会の活動を記録しておくことが大切で、「いずみ」の発行にはそうした目的もありました。会報発行直後の役員会の記録を見ると、第1号の発行部数は400部、編集委員会を4回開いています。会報を出したことが北海道新聞や日本経済新聞にも報じられています。反響があったのですね。

斎藤 この時にすでに年4回発行が決まっていた、その後、この発行スタイルは現在まで続いています。一度も休刊がないというのは自慢できることですね。

橋本 周りからは「次の号はいつ出るのですか」などと言われ、長続きはしないだろうと見られていたようです。

切り貼りで始まった編集作業

——第2号を見ると12ページもあり、しかも、写真をふんだんに使い、それが全部、カラー印刷ですが、当時はどうやってつくっていたのですか。

橋本 一枚一枚、自分のプリンターでカラー印刷しました。初めの頃は大変でした。パソコンなどの技術を駆使できないから、ワープロで打った原稿を一本ずつ切り貼りしてページを作りましたね。文字通り、「切った、貼った」です。一枚、一枚に裏表を刷ったのですから、2号の場合、一部作るのに12ページ印刷しますから、400部なら4800枚刷った勘定です。

仲野 橋本さんのプリンターがこわれるわけ

だ。

斎藤 そのうちにもう少し上級の印刷機を持っている人にもお願いしたことがあります。2004年の10号からは現在のように札幌市の市民活動センターの機械を使って印刷するようになり、ずいぶん楽になりましたね。

パーフェクトな原稿依頼

——「いずみ」には会員ばかりでなく、芸術家をはじめ各分野の方の原稿が載っていて多彩な感じですが、原稿発注などは大変でしょう。

橋本 一般会員の原稿も大事だが、芸術家だとかその時代時代に必要な意見を持っている方たちの原稿も記録として載せておく必要があるのではという思いから、あらゆるジャンルの人に依頼するようにしています。

仲野 橋本さんが頼んだ人はだいたい100%執筆してくれていますね。口説き上手なんだなあ。

斎藤 私もほとんど断われたことはないですね。みんなOKしてくれます。ありがたいことです。それだけ会報が評価されているということではないでしょうか。

仲野 書く側にとっても400とか800部のものに載るといのは魅力的なのではないですか。

橋本 そこが大事なところ。書いた人の意見、主張がその時代のドキュメントとして残るのだから記録としての価値があるわけです。200万都市札幌には市民サイドに立った芸術的なジャーナルが少ないように思います。その意味でも、「いずみ」が将来にわたって、幅広い分野の人たちに意見表明の場を提供するのはいいことではないかと。

会報の果たした役割

——会報が友の会の活動に大きな役割を果

たしている面もあるということでしょうね。

橋本 創刊の頃、70人程度だった会員が4、5年で倍増したのは会報の効果が大きかったと思います。友の会が活動をアクティブに伝えるものは「いずみ」しかない。会報が多くの人の手に渡ることによって友の会を認識してもらえるのですから、これは大きい。

仲野 会員数の何倍も部数を配るのだから、外部に向ってのPR効果は絶大です。

斎藤 刷り上ると同時に市役所の札幌市文化部、市政記者クラブはもとより、札幌市観光協会などに直接配って歩きます。市長さんにもすぐ届くのですから…。

きめ細かな情報めざして

——最後に、会報の今後へ向けて、どんな「いずみ」にしたらいいのか。将来の方向性についてうかがいたい。

仲野 彫刻を中心に、誰でも参加できる、開かれた会報でありたいと思います。あくまでも彫刻を中心とする筋は通してほしいですね。

橋本 彫刻のファンが増えること、会員が意見を自由に表明できる会報でありたい。

斎藤 いい会報で、届くのが楽しみとうれいことも聞きますが、もっと会員の声を聞きたいとか、親しみの持てる会報であってほしいなどという意見もあります。具体的には会員コーナーの充実とか、会員の情報をきめ細かく集めるなど自分たちの会報として親しめる内容のものにしなければと思います。

橋本 札幌彫刻美術館は「本郷新記念」という字が加わって性格がいささか変わったように思います。でも、友の会はあくまでも「札幌」、「彫刻」をキーワードとしてこれからも活動を続けて行くわけですが、そうした思いを会報の中で表現していけたらと考えます。

創刊そして30号、本郷新に込めた思い

いずみも今号で30号になった。長くもあり短くもあり。よくも続いた30号と言える。そして自立した友の会活動も8年を過ぎた。

発刊の第1号に選んだ作品は札幌大通公園の本郷新代表作「泉の像」で、誌名もそこからとって「いずみ」にしようとした。全員一致で会報「いずみ」が誕生した。

思い起こすと16年前の3月19日、私は札幌芸術の森にいた。彫刻解説のボランティアとして講習を受けていたのだ。野外彫刻73点の中の「鶏を抱く女」、この作家の作品はどこにいくつあるのだろう。これが興味が疑問に変わった瞬間だ。誰に聞いても納得する返事はない。では私が自分の足で調べよう。こうして無謀ともいえる道内の彫刻全作品をめぐる長い挑戦が始まった。

札幌彫刻美術館、そして3年間と短かったが道立近代美術館のボランティアで知識の幅を広げながらの道内めぐり。その頭の中にはいつも記録にない本郷新の作品を見つけないかと願望があり、それが実現、5作品の発見につながった。

年々増加する私の記録、道内作品数は2000を超えた。その中の本郷新作品は札幌の34点を含む94作品、道内設置作家では一番多い。

その中から季節感も考えながらひとつ、またひとつと、「本郷新彫刻シリーズ」として「いずみ」で紹介して来たが、モニュメンタルな作品はほぼ終わった。

心残りは1点—それは「望洋の碑」(釧路管内白糠町)だ。太平洋を望む丘の上であって、豊かな海の幸を喜ぶ親子のとていい作品な

仲野三郎(会員、野外彫刻写真家)ののだが、心無いいたずらと破損で見るに耐えない状態になっている。こうなるまでどうにかならなかったのか？ 町は？ 美術館は？ と、いい作品だけにつくづく思う。

このように29号までは主として道内のモニュメンタルな作品を見ていただいていたが、30号は本郷新の作品としてどうしても省くことの出来ない肖像作品とした。

本郷新は多くの人の肖像も手がけている。道内設置だけでも20人に及ぶ。その本郷新が初めて荻伏村(現日高管内浦河町)に頼まれた胸像の報酬で東京・世田谷にアトリエを建てた。創作の拠点を得たのだ。今も荻伏の作品には見逃すことは出来ない若い本郷新への高い評価の一文が添えられている。しかし、家を建てるのが精一杯でカーテンまで手が及ばなかったとの事。ほほえましい。

1928年5月の卒業直後に国画会に「女の首」で初入選した本郷新。そのバックボーンには高村光太郎があった。光太郎に師事した本郷新は駒込の高村宅をたびたび訪れている。そしてそこには高村光太郎の彫刻十カ条があった。

その冒頭は「彫刻の本性は立体感にありしかも彫刻のいのちは詩魂にある(以下略)」で、これらの教えが若い本郷新に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

彫刻は楽しい。そして見るたびに感銘も受ける。今後も本郷新の研究を進め、作品を見守りながら旅を楽しんで行きたいと思っている。

会報「いずみ」30号までの軌跡

会報「いずみ」の創刊は2002年(平成14年)9月。現在とはやや体裁が異なるが、表紙には仲野三郎会員が撮影した「泉の像」の写真が右肩に大きく配された。2号からは「本郷新彫刻シリーズ」と銘打ち、会報の表紙を飾る目玉となる。さらに、創刊号らしく、藤島積彫刻美術館理事長、三輪望同館館長がそろってメッセージを寄せている。

釣り好きだった本郷新の雅号「抜海」をタイトルにしたコラム「抜海の日」が第2号から登場した。辛口をベースにした無署名の投稿欄で、20号(07年7月)まで続き、その後、絶えた。2号までの写真はオールカラーで頑張ったが、3号からは表紙を除いてモノクロになった。

3号では美術館主催の「宮の森散策」の行事をめぐって館側と友の会側との意見交換や美術館に対する提言をめぐって館長が美術館の主張を寄せるなど誌上での論議が目をつけた。

「〇〇ギャラリーを訪ねて」の表題で4号から原典夫会員が執筆していた展覧会評が6号(04年1月)から「ギャラリーシリーズ」として定着。17号(06年10月)から筆者が交代したが、21号(07年10月)で終わった。

8号(04年7月)あたりからページ数が10ページを超すようになり、寄稿原稿の豊富さと執筆者の多彩さが目立つ。各界の筆者が友の会の活動を認め、その要請に応じて快く原稿を執筆してくれたことの証左だろ

う。大内 和(会報編集スタッフ)

「いずみ」のこれまで最大のページ数は11号(2005年4月)の22ページ。この号は「本郷新生誕100周年記念特集号」として、09年9月に亡くなった栃内忠男氏(画家)をはじめ、各界の著名人に「私の中の本郷新」をつづってもらい、多角的に本郷新の人間像に迫った。また、仲野会員が本郷のエピソードを紹介した「本郷新のちょっといい話」が始まり、22号まで10回続いた。

一方、道内の美術館を中心に管理運営・企画の苦労話などを学芸員などに書いてもらう連載が15号の「木田金次郎美術館の11年」からスタート。20号から「ミュージアムの窓辺から」のタイトルがつき、29号まで15回にわたって、道内美術館が抱える現状と課題をレポートした。

このほか、21号(07年10月)に投稿として「友の会の拠点美術館問題」、23号(08年4月)の巻頭言に「彫刻芸術の殿堂としてあるために」が相次いで載った。いずれも彫刻美術館が札幌市芸術文化財団に移管されたことに伴い、友の会の活動基盤の在り方をめぐり問題提起だった。

創刊以来、7年。友の会の活動を陰から支え続け、30号に達した会報「いずみ」のこれまで果たした役割と存在意義は今後も引き継がなければならない。



十勝・中札内美術村バスツアー体験記



相原求一朗美術

友の会主催の秋のバスツアーが10月7—8の両日、一般参加を含め28人が参加して行われた。十勝・中札内村の「中札内美術村」、鹿追町の「神田日勝記念美術館」などで十勝の風土に根ざした美術を心行くまでじっくり鑑賞した。それぞれの場所での印象をつづってもらった。



神田日勝記念美術館

札幌→中札内美術村・相原求一朗美術館→六花の森・坂本直行記念館→池田・ワイン城→
十勝川温泉・かんぼの宿→鹿追町・神田日勝記念美術館→アートコレクション福原記念館→札幌

相原求一朗美術館

所蔵者のキャプションにぬくもり

小笠原 悦子(会員)

10月7日、秋晴れの空の下、中札内美術村を訪れました。札幌からバスに揺られて4時間、まずはレストランへ直行。豚汁、コロッケ、豆サラダと雑穀米。どれも素朴なおいしさで十勝の恵みを堪能しました。

北の大地美術館では「わたしの相原求一朗一点展」が開催中でした。雪の原野を描いた作品が多く、「私が居間に飾るなら」と、一点一点想像しながらの鑑賞です。結婚祝いに仲人

から贈られたもの、一目で気に入りに手に入れたもの、作家との出会いやふれあい—作品に付けられた所蔵者のキャプションからは大切にしている作品を多くの人に観てもらいたいというそれぞれの思いが伝わってきます。

まさに北の大地にふさわしい心温まる展覧会でした。札幌でも所蔵家に呼びかけて、こんな展覧会が開催されたらと強く思いました。

坂本直行美術館

十勝の風土にマッチした展示館

齊藤隆志・ミサヲ(会員)

十数年前に一度中札内村を訪れて、直行さん、相原さんの美術館巡りをした思い出がありますが、その後、直行さんの美術館が移転して、公園風に整備されていたのには驚きました。

中札内美術村は、カシワの森と十勝らしい牧

草地に、ぜいたくにゆったりと美術品が配置されているところが素晴らしいと感じました。

六花の森の小さな駅舎のような各展示館は、枕木から造られているものと思っていましたが、クロアチアの古民家のオーク材を再利用して建てられていて、釘などを一切使わずにしっかり

りと組まれたものでした。自然のぬくもりと堅牢さがマッチしていて、道々の草花を楽しみながら、また来たいと思いました。

直行さんは、山岳画家という思いがありますが、六花亭の包み紙、風呂敷の挿絵画家として、道民に親しまれていることを改めて感じま

した。

六花の森美術館といい、翌日の福原記念美術館といい、十勝の企業が地元の作家を育て、自前で美術品を公開していることに感動致しました。楽しい旅行にお誘いいただき、ありがとうございました。

神田日勝記念美術館

心痛むベニヤの画材劣化

森 茂 樹(会員)

時折、色々なツアーに神田日勝の名前が載っており、どんな絵を描く画家かに関心を持っていました。神田日勝は昭和12年、東京練馬生まれ。終戦の年の昭和20年8月、日勝8歳の時に鹿追村に家族ぐるみで移住し、営農生活に入りました。鹿追中学校で美術部を創設、油絵の制作を始めました。同校卒業後は農作業の傍ら画家として活躍、残念ながら32歳8ヵ月で病死しました。生前農民画家と言われるのを嫌い、自分のことを「画家である、農民である」と区別して語っていたそうですが、当時は敗戦後の物資不足時代、画板・絵具の

調達に大変苦勞したと思います。

初期の作品はベニヤ板にペインティグナイフやコテで描くという独自の画法でした。学芸員の説明では年々ベニヤ板や画材が劣化し心配しているとのことでした。馬、牛などの大作を拝見でき脳裏に残る美術館のひとつでした。私も終戦の年(中学2年)に援農に行き田植え、田の草取り、馬の世話をした経験もあるので、農家の生活実態の記憶はよみがえります。存命していれば72歳、私達と同じような世代です。ひとりでも多くの方が見学されることをお勧めします。

福原記念美術館

名画の個人コレクションに感動

車谷津矢子(会員)

秋晴れのよい日にアートコレクション福原記念館を鑑賞し、好奇心でいっぱいでした。

館内に入るとあることあること、数の多さと一流人の作品ぞろい。その中で印象深かったのは、東山魁夷のブルーの風景。銀座の日動画廊で見た20年前の作品は右に白馬、今回は左に白馬の違いでしたが、大変懐かしく思いました。また、有名な林茂の鉛筆デッサン画の力強い裸婦の大作には感動しました。

この記念館の創立者は大正7年新得町生まれの福原平治氏が若い頃から一流の品々を私財を投じて収集し、入館料を無料で公開することを実現されたことは敬服のほかありません。北海道人として誇りのようなものを感じました。

帰路、夕焼けにグレーの雲が絵のようで空からも美しいプレゼントをいただき、学びと共に楽しい旅でした。

友の会 2010 年新年会は1月 30 日に開催

講師に平岩博幸氏(札幌市民ギャラリー課長)

「札幌芸術の森誕生秘話」テーマに講演

友の会の2010年新年会は1月30日午前11時から札幌・すみれホテル(中央区北1西2)で開かれる。恒例の講演会は札幌市民ギャラリー課長の平岩博幸氏を講師に迎え、「札幌芸術の森誕生秘話」と題して、札幌の芸術鑑賞の拠点、芸術の森がどのように生まれたかを誕生にまつわるエピソードを交えて話してもらおう。

平岩氏は長年、札幌市で芸術の森建設に携わり、08年退職。09年、「札幌芸術の森由来記」を自費出版した。

会報「いずみ」の印刷を業者に委託

長いこと会報の印刷、発送は会員の手作業で行ってきたが、次号(4月発行、31号)から印刷作業を札幌の山藤三陽印刷(本社・西区宮の沢)に委託することに決まった。

業者に委託しても印刷経費などがこれまでと大差なく出来るため。発送作業はこれまで通り会員の手で行うが、業者委託に伴い、表紙も含めモノクロ印刷になるため、会報全般にわたってレイアウトを見直す予定。

札幌市が友の会へ事前通知

雪まつり中の「いずみの像」の囲いで

札幌市文化部はこのほど2月の雪まつり期間中、大通公園の《泉の像》が行事の都合で囲われ、鑑賞できなくなることを友の会へ事前通知してきた。こうした通知は初めてで、今後市と会の密接な情報交流が期待される。

解説ボランティアを募集!

街中の野外彫刻 あなたも解説をしてみませんか?

友の会では大通公園や中島公園などの野外彫刻作品の清掃や美術館巡りなどの行事の際、必要に応じて彫刻作品の解説を行っているが、野外彫刻解説部では解説のできる人を広く求めている。

同じ作品でも、解説者が替われば聞く人に新たな感動を与える場合が多い。また、彫刻作品の解説に携わることで、彫刻への理解と愛着が増す。

自分たちで解説マニュアルを作ったり、行事の際はもちろんのこと、友人や観光客を相手にも作品解説をしてみよう!

解説ボランティアの養成とマニュアル作りのために、研修会を開催する。具体的なことは後日決定するが、月2回程度、午後1時から3時頃まで、札幌エルプラザ(札幌市中央区北8西3)会議室で実施の予定。

解説活動やマニュアル作りをやってみたいという人なら、会員外でも男女を問わず、研修会への参加は自由。ただし、解説活動を行う場合には、友の会への加入が必要。

希望者は野外彫刻解説部の長峯慰子(ながみね やすこ、☎ 090-5956-3356)まで。締め切りは1月31日。

札幌彫刻美術館友の会会報「いずみ」 No.30

2010年1月1日発行

発行 札幌彫刻美術館友の会事務局

(札幌市中央区南9条西4丁目7-1-1003)

発行人 橋本 信夫

編集スタッフ 斎藤美年子 : 011-643-7246

大内 和 : 011-884-6025